

ましゅ 埋やちよ

No.29

千葉県八千代市
埋蔵文化財通信
2013. 9. 17
(平成 25 年)

ぼくしよ 特集 八千代市の墨書土器

墨書土器とは

墨書土器とは、土器に墨で文字や記号や絵などが書かれたもので、3世紀以降出現し、奈良・平安時代に多く見られます。関連して朱書や刻書やヘラ書きなども存在します。

八千代は墨書のまちだった

明治大学の古代学研究所が2010年に編集した「全国墨書・刻書土器データベース」によれば、全国で約12万点の出土数があり、その中で出土量が最も多い都道府県は千葉県の約2万1千点です。その県内で第1位は、なんとわが八千代市の約3千5百点なのです。全国でも平城京がある奈良市の約5千2百点、多賀城がある多賀城市の約3千6百点に次ぐ第3位となっています。墨書土器は、八千代市の古代史上の大きな特色なのです。

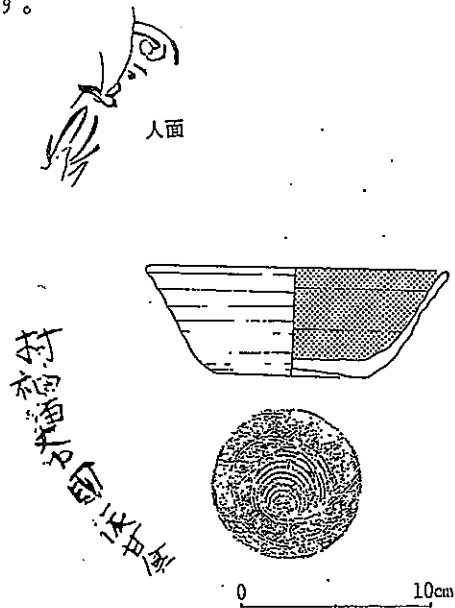
八千代名物「長文墨書」

墨書土器12万点といっても、一文字だけのものや記号、意味不明なもの、判読できないものが多数を占めています。その中にあって、八千代市には「長文墨書」と呼べるものが結構あります。どんなことが書かれているのでしょうか。まず、昭和52年～63年に財団法人千葉県文化財センターによって発掘調査された、萱田地区遺跡群（現在のゆりのき台）での発見からご紹介します。

権現後遺跡の地名・人名等墨書土器

萱田地区遺跡群のひとつ権現後遺跡から出土した、平安時代初期のお椀形土器が当時話題となりました。肉眼ではよく見えなかったのですが、赤外線カメラで見ると、墨書は「村

神郷丈部國依甘魚」(むらかみごう はせつかべ くにより あまな)と書かれているらしく、他に人面が描かれているらしいことがわかったのです。



権現後遺跡の墨書土器

10世紀に編さんされた『倭名類聚抄』(わみょうるいじゅうしょう)という百科事典に「下総国印幡郡村神郷」という地名が記載されています。これは現在の八千代市村上付近と考えられていたのですが、新川をはさんだ対岸の萱田からこの地名墨書が出たのです。「丈部」は古代に存在した姓で、有名なのは『続日本紀』に奈良時代の天応元(781)年条に「下総国印幡郡大領丈部直牛養」(しもふさのくに いんばぐんのたいりょう はせつかべのあたいうしかい)の名前があります。「大領」とは郡の役所のトップで、通常その地域、すなわち印幡郡の有力豪族が就任するものです。この人と同じ姓の「國依」という人物がいたらしいのです。

「甘魚」は、おいしいさかな、あるいはごちそうの意味と考えられます。「村神郷に住む丈部國依のごちそう」ということでしょうか。人面は、一部わかりませんが、ひげをはやした人物の顔のようです。

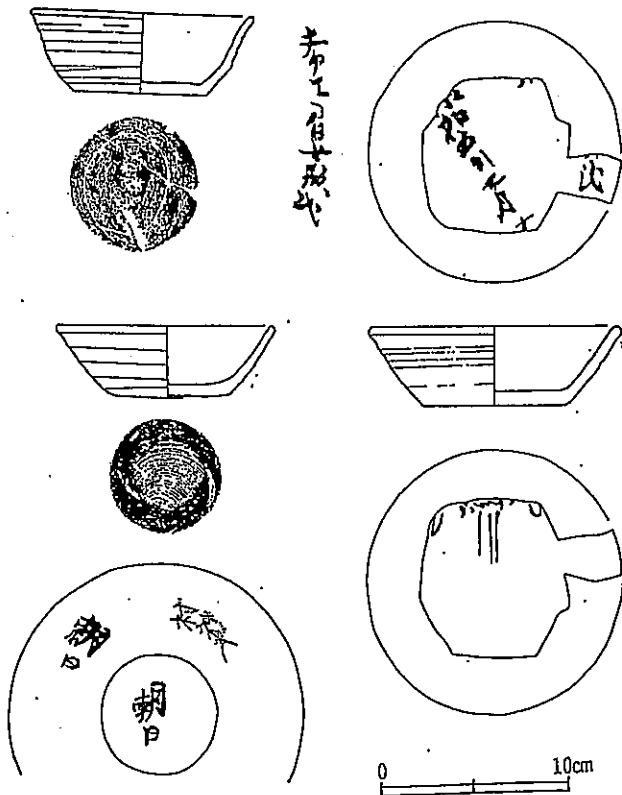
北海道遺跡の地名・人名等墨書土器群

同じく萱田地区遺跡群の北海道遺跡から出土した、奈良時代末期～平安時代初期のお椀形土器3点にも長文墨書が見つかりました。

1つは、「丈部乙刀自女形代」(はせつかべおととじめ かたしろ)と判読されました。またしても「丈部」。「刀自女」は、女性の意味で使われます。「形代」とは？

2つ目は、大きく割れているため文字が欠落しているのですが、「承和五年二月十」と「代」と判読されました。「承和五年」は平安時代初期、西暦838年に当たります。「代」は「形代」の一部でしょうか。底部外面には人面のあごひげかと思われるような線画もあります。

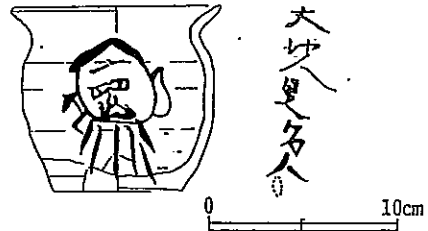
3つ目は「村神丈」「朝日」「朝日」と判読されました。「村神」と「丈」がまたしても。



北海道遺跡の墨書土器

白幡前遺跡の人名・人面等墨書土器

萱田地区遺跡群のひとつ白幡前遺跡から出土した、奈良時代末期の小型の甕にも文字と人面が描かれていました。文字は「丈部人足召」(はせつかべひとたりめす)と判読されました。またまた「丈部」姓。名前は「人足」。人面には両目・大きな左耳・あごひげのあるマンガのような顔に見えます。



白幡前遺跡の墨書土器

上谷遺跡の墨書土器群

平成4年～11年に市の遺跡調査会が発掘調査した、保品の上谷遺跡(現在のもえぎ野)からも大量の墨書土器が出土しました。その中で、ある1軒の竪穴住居跡から、完形の椀形土器が4点、2つずつ重なって出土しました。一方は正位の置き方、他方は伏せた状態でした。この4点に殴り書きのような墨書があり、非常に読みにくいのですが、「丈部麻口女身召代二月」、「丈部真里刀女身召代二月十五日」、「丈部阿口口女身召代二月」、「丈部稻依身召代二月十五日」と判読されました。うち2つには明らかに別の筆跡で「西」と書き足してありました。土器は9世紀中頃のものだと推定されますが、その頃のある年の二月十五日、4名の丈部姓の人物が、この住居内で、何かをしたのでしょうか。

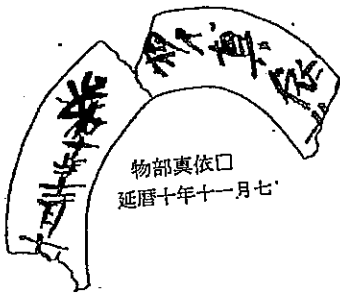
この他にも「延暦十年」(西暦791年)、「弘仁十二年」(821年)、「承和二年」(835年)という紀年銘、「物部真依」「丈部千総石女」「丈部申万」「丈部角万呂」「廣友」などの人名、「下総」「村神」という地名などが判読されています。人面も刻書を含め類例を増やしました。

墨書土器群の最高峰

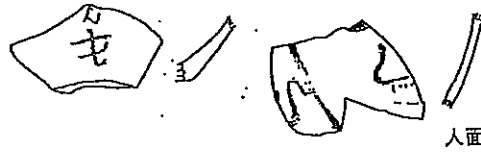
そしてついに出ました。墨書土器の最高峰かもしれない逸品です。何の変哲もない甕形土器かと思ったのですが、水で洗っていると墨書が



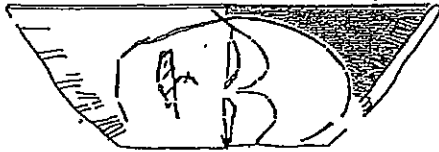
下総 村神 □□



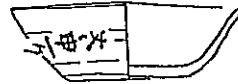
物部真依口
延暦十年十一月七



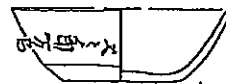
人面



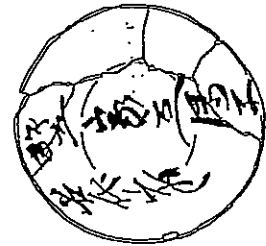
人面刻書



丈部申万



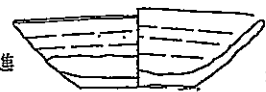
丈部角万呂



野家立馬子召代進

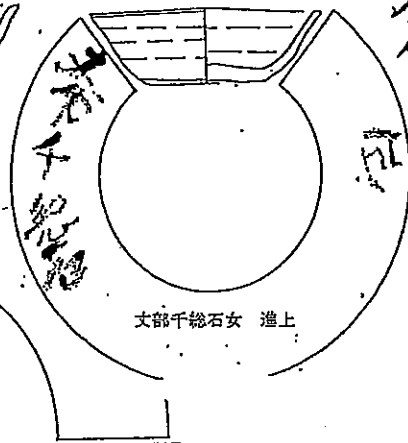


承和二年十八日進

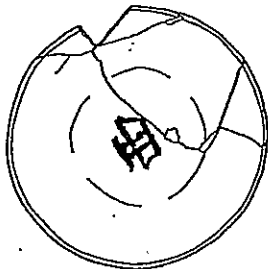
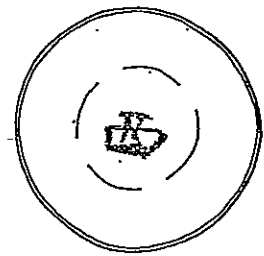


廣友進召代
弘仁十二年十二月

人面



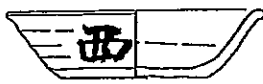
丈部千總石女 進上



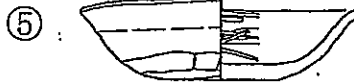
丈部真里刀女身召代
二月十五日



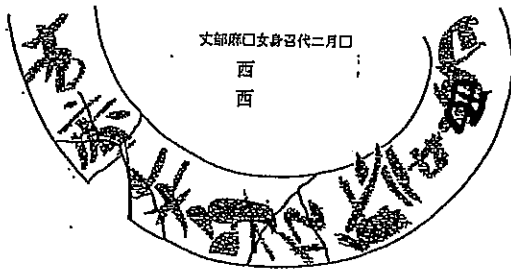
丈部阿口身召代二月
西
西



丈部麻口女身召代二月口
西
西



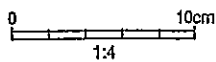
丈部稻依身召代
二月十五日



丈部麻口女身召代二月口
西
西



丈部稻依身召代
二月十五日



見えました。それも多数。文字は薄く読みづらかったのですが、赤外線カメラを使った結果、「下総國印播郡村神郷丈部（廣）刀自咩召代進上延暦十年十月廿二日」と判読、さらに人面もあることがわかりました。地名「下総國印播郡村神郷」・人名「丈部（廣）刀自咩（ひろとじめ）」・「召代進上」・紀年銘「延暦十年十月廿二日」・人面画の5つの要素が完全にそろっているのです。この読みが正しければ、「下総國印播郡村神郷に住む丈部（廣）刀自咩が延暦十（791）年十月廿二日に召代進上した」ということになります。

「召代進上」とは何か。ここまでの説明で、「形代」「代」「召」「身召代」などの文字があることを述べました。いずれも意味の近いもの、同じ表現の一部と考えられます。国立歴史民俗学博物館の平川南氏は、仏教説話集『日本靈異記』の説話に着目し、器に住所・氏名を明記し、その中に「甘魚」のようなものを入れ、自分が地獄へ「召さるる代わりに」このごちそうを神仏に差し上げます、という意味で書いたもの、と解釈されました。つまり、延命・長寿のための呪文のようなものでしょう。

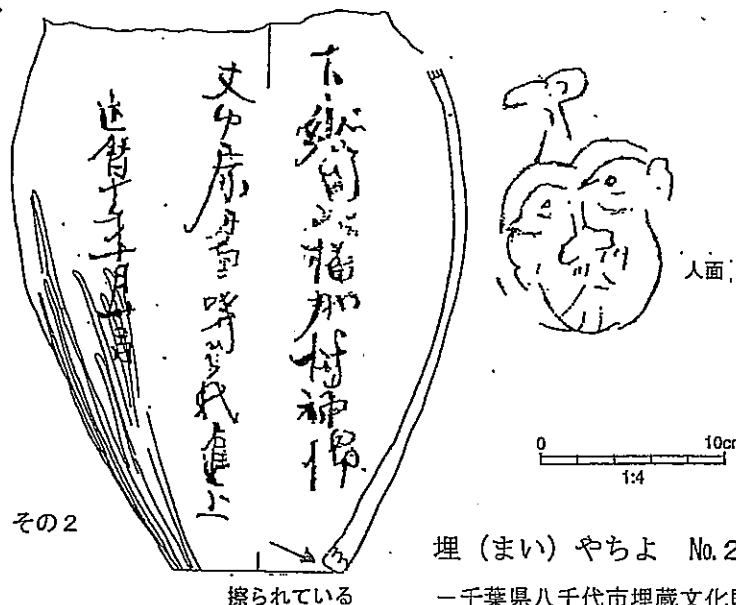
これに対し、群馬県教育委員会の高島英之氏は、「召代」「形代」を「神を祭る時、神霊の代わりに据えた物」と解釈し、『古事記』や『日本書紀』に箱や器に神が宿するという説話があることをもとに、神に「依代」（よりしろ）として土器を奉ったとされています。

いずれにしても神仏への祈りを表した墨書と考えられているのです。

人面については、神仏の顔を描いたという説や祈願する本人の顔を描いたという説などがあります。

この甕の口縁～頸部は欠失しています。底もきれいに割られて底なしになっていますが、割口は滑らかになるように擦られています。

墨書の内容と土器の状態とが、奈良時代末期～平安時代初期の当地域の祭祀や信仰の一端を示していると言えるでしょう。具体的な儀式の復元には至っていませんが、印旛地域には八千代市以外にも墨書土器の類例が多く、少しずつ解明が進むものと期待しています。その解明に八千代市の墨書土器も大いに貢献すると思われれます。



埋（まい）やちよ No.29

—千葉県八千代市埋蔵文化財通信—

平成25年9月17日

編集・発行 八千代市教育委員会

教育総務課 文化財班

八千代市大和田138-2

☎276-0045 ㊚047(481)0304

—編集後記—

今回は千葉県北西部地区文化財発表会のテーマに沿った内容を特集する予定です。発表会は来年2月1日に八千代市総合生涯学習プラザにて開催しますので、お楽しみに。